

「神の家で生きる」

ルカによる福音書 第2章 40節～52節

説教 岡村 恒牧師

「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前」だ(49節)。12歳の主イエスの口から出た言葉です。イエス様は私たちと同じように母のおなかから生まれ、こども時代を過ごして、12歳の時がありました。主は、全知全能の神のひとり子、永遠に変わる事のない父なる神と等しいお方です。これは、とても不思議な話です。

ユダヤ人にとって、過越祭のためにエルサレムに上って行くことは何よりも大切なことでした。かつて神が、ユダヤ人の先祖をエジプトから救い出してくださったので、自分は今ここに生きているのだ、ということを経年確認する祭りです。同じナザレ村の人々と団体旅行をするようにして巡礼の旅をして来ました。特に12歳というのは、ユダヤ人が社会的、宗教的に成人と認められる年齢です。神の前では一人の信仰者として信仰共同体の一員となります。この年齢になると、自分の責任で神の御心に応えて、律法を守って生きていくのです。

祭りの後、主イエスの両親は他の仲間たちと一緒に帰路につきました。1日が経ってから、自分たちの子と一緒にいないことに気が付きました。探しながらエルサレムに戻っていくと三日目に、神殿の境内で主イエスを見つけました。神に犠牲を捧げて礼拝をし、神の言葉について語り合っている場所で、神の言葉の専門家たちの中心に神のひとり子が座っておられました。

この神殿で、神が私たちに何を語りかけ、何を求めておられるか、いつも考え、語り合っている聖書学者や律法学者の真ん中に、12歳のこどもが座っていたのです。聞いている人は皆、主イエスの賢い受け答えに驚いていました。やがて主イエスが、律法学者たちが神も神の言葉も知らないとお叱りにある場面があります。主イエスだけが、他の誰よりもよく父なる神の思いをご存じでした。ですからこの日も、神殿で人々の質問に答えたのです。

神と等しいお方が、わざわざ地上にまで下って来て、私たちと同じように地上の旅を経験し、家族と共に生き、都上りの歌を歌いながら神殿に上って下さいました。しかし12歳になって、これまでのように両親の信仰によってではなく、神のひとり子として、父なる神の御心について思いめぐらし、お話になりました。

主イエスは後に、私たちに真理の御霊を注い

で下さると約束下さいました。聖書は私たちを『聖霊の宮(神殿)』と呼ぶのです。主が助け主、聖霊を注いで、私たち一人ひとりを神の神殿にすると約束して下さいました。いつも、いつまでも主イエスがそこに住んで下さる神の家にするという約束です。

復活の後、弟子たちの前で天に昇って行かれた主イエスは、あらかじめ約束して下さいました通り弟子たちに聖霊を注いで、弟子たちを新しく創り変えて下さいました。そして今日でも、洗礼を受ける者に必ず賜物の聖霊を注いで下さり、この汚れに満ちた体を聖霊の宮、神の神殿にして下さいます。

私たちは神に祈るために、どこかにある神殿に出かけて行く必要がなくなりました。いつ、どんな場所においても、神が共に居て下さり、語りかけ、祈りを聞いて下さっているのです。主イエスの約束は確実なので、その通り、私たちに実現しました。クリスマスの言葉「その名はインマヌエルと呼ばれるであろう。これは、『神われらと共にいます』という意味である。」(マタイによる福音書 第1章23節)。「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(同 第28章20節)という約束も、聖霊が注がれることによって実現しました。

神のひとり子、主イエス・キリストがあのかの十字架の上で命を与え尽くして下さい、私たちの罪の赦しのための贖(あがな)いとなって下さいました。私たちは日曜日ごとに集まって、この主イエスの十字架の死と復活を思い起こします。いつでも、いつまでも私たちと共にいて下さる神のひとり子を思い出すために、私たちは礼拝に集まります。繰り返す神の約束を聞き、神の約束が真実であること、すでにこの身に実現したことを確認するためです。

この日、宮詣でをされた主イエスは、やがてまた過越祭に上って来て、ご自身を罪の赦しのための捧げものとしてお与えになります。私たちの罪の赦しを実現し、私たちに永遠の命を与え、聖霊の宮、神殿として下さるために。そうして、「私が父の家にいるのは当たり前」だと、私たちに向かって言い切って下さいます。私たちの主が、再び来て下さるその日を心待ちにしながら、神の神殿として生かされている恵みを感謝して歩みましょう。

(記 岡村 恒)